学徒勤労動員と教員

石井　喬

一　はじめに

『学徒勤労動員の記録　戦争の中の少年・少女たち』という本が発行された（1999・7　高文研　1800円＋税）（以下『記録』と略す）。この本の編者である「神奈川の学徒動員を記録する会」の創立（1996・5）以来の会員の一人として、私はその本の編集に携わってきた。その過程で気づいたことをメモしておきたい。

神奈川県の学徒勤労動員にはどのような特色があるだろうか。その一つは、県下の120校の生徒が県内の工場や農家に労働に行かされただけではなく、他県の300校近い学校の学徒が、京浜工業地帯を中心とする本県の工場に動員されてきたことにある。慣れないまた危険な重労働・殺人的な混雑や空襲の恐怖下の通勤・窮迫した食糧事情による空腹など、自宅通勤の者でさえひどい状況に置かれたのに、他県から動員され、寮生活を強いられた者にとっては、さらに過酷な毎日であった。動員された学校名は、現在までに判明したものが前掲書の巻末に表として掲載されている。今後もっと増える可能性があるが、県別の学校数とおおよその人数を巻首の地図から見ていこう。挺身隊を除くと、北海道校7校・青森11校約1000人・岩手31校約3000人・宮城23校約2000人・秋田7校約500人・山形20校約1500人・福島26校約5000人・新潟4校約200人・群馬2校・栃木1校・茨城4校・埼玉2校・東京56校約5000人・千葉15校約800人・山梨12校約1500人・静岡14校約1200人・京都1校・兵庫1校・徳島1校・福岡1校・大分2校と日本全国に及び二万名を越えている。

「記録する会」を作り、『記録』の編集・執筆の中心となった笹谷幸司氏は、学徒動員研究の動機として、95年1月の阪神淡路大震災をあげている。当時氏は神戸市東灘区住吉小学校へボランティアに行き、その地の被災状況を空襲に重ね合わせ、現在の中高校生と同年令であった学徒たちについて、戦争との関わりの中で何か調べてみたいと考えるようになったことがきっかけとなったという。筆者の研究のきっかけは、逗子に動員された宮城県や福島県の高等女学校の学徒のことがあまりにも知られておらず、学徒動員の全体像をもっと明らかにする必要を感じたことにある。そして筆者も同年2月末、神戸市三宮区二宮小学校で被災地の方々のお手伝いの真似事をする機会を与えられた。二宮小学校の教員は本務である子どもの教育以外に、学校に避難してきた人々の面倒をみることに忙殺されていた。その時に思ったことがある。それは、もしあの地震が生徒の在校時間中に起きたのなら、教員は生徒の命を守るため何ができたろうか、何をしたのだろうか、もし自分だったらどうしただろうか、ということであった。そして同じように生徒の命が危険にさらされた動員の時に、当時の教員たちがどういうことを考え、どういう行動をとったのか、を追ってみようと思うにいたった。

二　動員先はどう決められたのか

動員先の決め方については、資料が焼かれたりしてほとんど残っておらず、わからないことだらけである。例えば、宮城県からは10校以上の高等女学校の女生徒が横須賀市やその付近の海軍関係の工場に動員された。海軍工場としては海軍工廠・海軍燃料廠・海軍航

空技術廠などいろいろあり、その中に入るとまたいろいろな部門があった。どの女学校が、どの工場のどの部門のどの職場に配置されるのかは、どのように決められたのであろうか。そして配置先が指示された時、学校・教員がどのように対応したのかも、不明なことが多い。

栃木県から本県に動員されたのは、現在わかっているのは県立大田原中学（現大田原高校）だけである。なぜ一校だけ神奈川県に派遣されたのか。ほかに県外に動員された学校はなかったのか。これは栃木県での研究課題であろうが。

福島県立福島高女（現福島女子高）の記録『敷島の海いまなお藍く』にはこうある。

〝私たちは、なぜに横須賀まで出かけて行かなければならなかったのか。単純かつ素朴な疑問である。四年生が福島市内の工場に出動していた後のことだから、三年生が割り当てられるのは当然のことに違いない。だが、なぜに横須賀までという疑問が解かれたわけではない。（中略）それに職員会議等でどのような話し合いがあったのか、知りたいところである。〟

たしかに、より幼い三年生が親元を離れてより遠くへ行かされることには、疑問を持たざるをえないであろう。別のところにこういう記述もある。

〝通年動員横須賀行きが決まった後、Uさんのお父さんやKさんのお父さんは、「確かに国策かもしれない。だけど遠く横須賀まで行かなくてもいいだろう。福島でも御奉仕できるではないか」と、校長先生に話に行ったという。〟

どのような話し合いがなされ、親の主張がなぜ通らなかったのであろうか。

県内の例をあげてみよう。

湘南中学（現湘南高校）の五・四年生の一部が寒川町の相模海軍工廠に動員された。それはクラス単位でもなかったし、通勤事情によるものでもなかった。いくつかの動員先の中から、「あそこなら食糧事情が良さそうだ」という理由で自分で選んだという証言もある。しかし一方で「自分はなぜあそこへ行かされたのかわからない」という人もいるのである（『寒川町史研究』6号）。またこの工廠では、毒ガス（イペリット）を製造しており、それは大変危険な作業であった。動員された中学生の中ではただ一校山梨県立日川中学（現日川高校）だけがその作業に関わることとなった。これもなぜ日川中学がそれに当たらされたのかは不明である。

横須賀商業学校（現横須賀市立商業高校）の卒業生の一人は、動員記録『お母さん　さようなら』の中に次のように書いている。

〝もし当時が今の様に理屈が自由に言える時代だったら、幼いとは言へ仲間の誰かしらが「横須賀市内周辺には軍需工場として働く場所が沢山あるのに、何故私達は横須賀の住居を離れて横浜を通り越して、寄宿までしてよりによって川崎の外れに行かなければならないのか」という疑問をぶつけたに違いない。〟

東京鍛工所川崎製造所に動員された彼らのうちから、4月4日の空襲による寮直撃で12名の死者を出しているのである。生き残った一人は、次のように無念さを述べた（「記録する会」会報1号）。

〝どんなシナリオで我々の動員先が決定されたのか知りたいのです。地元横須賀の工場に動員されていればあの十二人の犠牲者が出ないですんでいたはずです。〟

企業からの動員要請に学校が応えたこともあるようだ。平塚高女（現平塚江南高校）の記録『火薬廠のある街で』には、次のような一節がある。

〝企業側から、県へ日参して、「県立平塚高女の生徒を是非うちの工場へ」という要請があり、一クラスだけ日華航空（機株式会社）へ動員されることになったのだそうだと聞き伝える人がある。〟

その工場の昼休み、暖房用の小さな手あぶりの火がペイントに引火し、その缶が爆発して、生徒2名が火傷・死亡するといういたましい事故があった。

動員引率の教員もどのように決められたのだろうか。宮城県立石巻高女（現石巻女子高）の教員について、一人は片脚をかなり引きずる障害のある男性で、もう一人は「教員間では格が低い方でした」という記述が『記録』の中にある。

学校間・教員間の格差などの影響がこういうことにも及んでいたのであろうか。

三　動員と「抵抗」

かつて戦争の問題を授業で扱う時、被害の面が強調され、だからもう戦争はイヤダという教育がなされてきた。これに対する反省から、現在では「侵略・加担・抵抗」の視点に立って近現代史を捉えなおす必要が論じられている。動員された学徒が戦争に加担させられたことは事実である。純真な若者だからこそ「お国のために」一心不乱に働いたのだ。多くの学徒が年配の労働者の真剣みの無さを批判している。しかし数十年たって加担の事実に気づいた体験記も書かれるようになった。では学徒動員の中で「抵抗」はあったのだろうか。意識的な戦争への抵抗はなかったであろう。しかし過酷な状況の下で人間性・人権を守ろうとする動きが学徒の中に出ることがあった。これを無意識の抵抗と見ることはできないだろうか。また、生徒の生活と生命を守ろうとする教員の行動もあった。その一つのあらわれが、1945年3月末からの県外動員学徒たちの無断引き揚げという行為である。これは教員主導で行われたことが多かった。『記録』の「Ⅳ軍の許可なき帰郷」及び「学徒動員概説」の項でいくつかの事例が取り上げられているので参照してほしい。教員の中には、命懸けで生徒を守った者がいたのである。当時の憲兵や特高警察の恐ろしさは、現在では想像がつかないほどのものであった。『週間文春』99年8月26日号で作家小林信彦は次のように書いている。

〝NHKのドラマで「すずらん」というのがあって、たまたま観たのだが、戦時中の場面がひどい。登場人物全員が反戦的・厭戦的言葉を平気で口にする。全員が特高警察に逮捕されても不思議ではない。太平洋戦争末期に〈厭戦〉気分はあったとしても、〈反戦〉的大衆なんて存在しなかった。〟

川崎に動員された福島県会津中学（現会津高校）の場合は「集団逃亡計画」を立てたが、教員が憲兵に拘束されて失敗、解放後の教員の顔は腫れ上がっていたという。無断引き揚げに成功した宮城県石巻高女の場合は、学校に特高警察が調査に来た（結果は生徒にはわからなかったが）。そういう弾圧を予期しながらも、生徒を守ることを第一に考えた多くの教員がいたのである。しかしそういう教員ばかりではなかった。『記録』の中では、寒川の相模海軍工廠から八王子の川口村に配置転換された静岡・伊東高女（現伊東北高）の例を見てほしい。これは生徒の離脱を日本刀を抜いて阻止した例だが、同所から学校に逃げ帰った相洋中学（現相洋中・高校、神奈川県）の場合は、学校が生徒を川口村に追い返している（『川口川のほとりにて』）。ここで、『記録』がふれていないいくつかの抵抗と考えられる例を見ておきたい。

〔川崎　富士電機工場に動員された栃木県立大田原中学の場合〕

これは生徒主導の脱走計画を教員が認めざるをえなかったという例である。1945年4月15日深夜の川崎大空襲で浅田町の工場は壊滅した。仕事が全く無くなったことを見た生徒たちは4人の級長を中心に「集団脱走」を計画し、昼食中の教員に無断で、整然と隊伍を組んで工場を出た。歩いて大田原まで帰る計画であった。しかし教員はすぐに気づき、トラックで後を追い、六郷川鉄橋の手前で生徒は捕まってしまった。堀越正春は『わすれなぐさ第三集』に次のように記している。

〝「お前たちはなんだ！」怒りにふるえる校長と引率の先生方がトラックからとび降り、道路の端で学校長の叱責、しかし、私たちは全く無言、先生方の表情も固く黙ったまま。数分して校長は言いました。「では行こう」　とうとうおれたちは勝っ

たのです。〟

校長も生徒の決意の固さに折れざるをえなかったのか。教員は入手が困難だった生徒の乗車券を工面までしている。同様のことを金森道夫も『旭光あまねく』に書いている。

〔静岡県・豆陽中学杉浦正二先生の場合〕

追いつめられた生徒を守ろうとしたのではなく、主体的に生徒を導いた教員もいた。その一人として『記録』では「毒ガス製造工場と反戦教師」の項を見てほしい。豆陽中学（現下田北高）の教員杉浦正二のことを、飯田十郎は「こんな立派な先生もいた」という題で書いている。杉浦は生徒の陸軍経理学校への願書を意図的に隠し、詰問した生徒に対して「そう焦ることはない。間もなく自由の時代が来る。近いうちにだ。」と諭した。また生徒の帰郷用のトラック使用の約束に違反した工場長のO少佐に関して、運輸部とかけあい「少佐を軍法会議にかけろ」とまで怒号した。

〔平塚高女前田先生・杉浦先生の場合〕

平塚高女（現平塚江南高校）の動員記録は『火薬廠のある街で』として刊行されている（1997）。その中の「前田先生」という文による。平塚高女は相模海軍工廠に動員された。正門入門に際しては、海軍式に各校は「歩調とれっ」「頭右っ」で行進したが、平塚高女は「女学生にそんな軍隊式などとんでもない」という付添い教師の前田の断固たる主張により、それを一切行わず、個々に一礼して通過した。また動員女学生の一つのパターンのような鉢巻きもついに一度も締めなかったし、前田も「締めよ」とはいわなかった。終戦後七、八年たってから「よく相廠の上層部（そのほとんどが軍人）が黙っていたものですね」という卒業生からの問いに対し、彼は「黙っているわけがないだろう。〈門を出入りの作法などはいってみれば、あれは教育の分野だ。働きに動員されたのだから、作業について命令したり、指図したりするのは、これは当然だが、しかし彼女らは平塚高女の生徒なのだ。国の命令で工廠へ来ているが、一校の生徒であって、そのために教師が学校から付き添って来ている。そこが一般従業員とは違うところなんだ。何のための付き添い教師なんだ。教育の分野に属することには一切口を出さないでくれ〉・・・とまあ俺は言ってやったがね」。この前田は直木賞候補にもなった作家鳴山草平であった。

また同書には、日本国際航空株式会社に動員された生徒が、資材不足で作業ができなくなり、教科書を読んでいたいたことを工場側がとがめたことがあった。その時付添い教員であった杉浦さとは「学生ですから仕事が終われば勉強して良いはずです。それがいけないのでしたらこの子たちを連れて学校に帰ります」と生徒をかばったという。

なお、この本の中には、岩手県盛岡中学（盛岡一高）の石橋という教員が、空襲後の川崎から、工場の反対を押し切って、敵前逃亡と見なされることを恐れず、生徒を強引に帰省させたことも記録されている。

〔親が生徒の配置転換を運動し実現させた〕

県立小田原中学（現小田原高校）の動員記録として小田中日光会編『ああ紅の血は燃える』（1994）がある。小田中三年生4クラス231人は、1944年7月、川崎市溝の口の日本光学川崎製作所に動員。全員が日光寮とよばれた寄宿舎2棟に入寮した。しかし寮生活で体調を崩す者が続出し、空襲も激しくなってきたことを心配した親たちは、学校長とも相談し、45年2月、県知事に対し「生徒を親元より通勤可能の範囲に在る工場に配置転換すること」など五カ条の請願を提出した。この請願は奏功し4月10日に退寮、12日から自宅通勤に変わった。ところが6月11日、生徒の一人が工場でP51機の機銃掃射のため死亡した。そのことも原因したのであろう。6月19日に配置転換が決定され、日本光学製作所への動員に終止符がうたれた。このことは親たちによる動員体制への抵抗といえないだろうか。

〔生徒によるストライキ〕

歴教協編『語りつぐ戦中・戦後』の中に星野朗「勤労動員中学生

のストライキ」という都立豊多摩中学（現豊多摩高校）の生徒の行動が紹介されている。あの厳しい支配・統制下の戦時中に、生徒がストライキを敢行したという記録はいくつかある。しかしそのストライキがどのようなものであったかについてきちんとした記録は本県には少ない。『記録』の中には、「日記に見る動員学徒のストライキ」という会津中学（川崎のヂーゼル自動車への動員）の卒業生の一文が載っている。動員中の日記の中に「ストライキをおこす」という記述が3日にわたって綴られている。原因は労働に関してではなく食事・食堂への不満からの行動であったようであるが、書いた当人が現在ではその事実を記憶していない。記述者は「私には驚きがあった。それはストライキの内容が不明確であったとしても、あの戦時体制一色の時代にストライキという言葉が残っていたことである」と回想している。

前掲『火薬廠のある街で』の中で、平塚高女の引率教員の談として、日本国際航空の工場で、生徒が一斉に休んでしまった日があったとなっている。待遇や食事・食器への不満がそういう行動をとらせたのだろう、としている。生徒側の体験記は採集されていないが、一種のストライキとみてよい行動だったのだろうか。

『記録』編集の中心となった笹谷氏は、ほとんど独力で各校の記念誌や体験集を収集した。それらをまとめて1998年に『神奈川の学徒勤労動員』という170ページほどの本を自費出版した。その中から、ストライキやそれに類すると思われる記述をあげてみたい。

○県立秦野中（現秦野高校）　五・四年生、横浜日産自動車。上級生の暴力事件がありこれに抗議して下級生のストライキ。

○県立商工実習学校（現商工高校）　杉田の石川島航空工業。生徒と配属将校の対立や下級生の夜勤に反対して引率教員と対立。

○法政第二中（現法政大学第二高校）　日本気化器では自習時間確保の要求を行った。日本冶金や明治製菓では生徒の集団労働忌避行為もあった。

○藤沢商業学校（現藤沢商業高校）　五年生、戸塚の日本加工。監督教師と工場の間で生徒の待遇をめぐる対立。四年生日本鋼管鶴見造船所第八鶴扇寮。蚊の大量発生や食事のひどさもあって生徒の不満が爆発し、引率教員は校長に配置転換を求めた。その後早朝七時の出勤を条件に自宅通勤が認められた。

○青森県立弘前中（現弘前高校）　四年生、川崎の東京航空計器。工場が（空襲で）焼失したにも関わらず動員解除が認められず、工場長を「胴上げ」しようと言うことになり、憲兵と対立したという。校長が上京して処理するという。

○岩手中（現私立岩手高校）　五年生、日本鋳造鶴見工場。正月帰郷の約束が果たされず、年末にはサボタージュを敢行、工場や教員と対立し、以後は仕事をするふりをした。

○福島県立白河高女（白河女子高）　四年生、東芝小向工場。ストライキもしたという。

○山梨県立都留中（現都留高校）　四年生、金沢の海軍航空技術支廠。十二月には動員解除を要求してストライキを起こした。

○都立一中（現日比谷高校）三年生、横須賀海軍工廠深沢分工場。クラス内では集団脱走の計画が持ち上がり担任教師もこれを黙認していたが、やがて終戦となった。

当時の中学生や高女生が今と違う強烈なエリート意識を持っていたにしても、一方で国家や軍への忠誠心をたたきこまれ、マインドコントロールされた「純粋まっすぐ君」であった。そういう心情の生徒が、しかも憲兵や警察の厳しい監視下で、このような自分たちを守ろうとする抵抗行動をとった勇気は、感嘆に値することではなかろうか。そして生徒たちがこのように立ち上がった時、引率教員や校長の生き方・姿勢は鋭く問われたのである。それは無断帰郷を生徒が計画した時も、学校側が企画した場合も同様であった。

〔無断帰郷あるいは帰郷要請行動〕

命を守るための無断帰郷や脱走あるいはその計画については、既に大田原中・石巻高女・会津中・伊東高女・相洋中・盛岡中などについて見てきた。『記録』には、岩手県東北高女（現盛岡白百合学

園）・岩手県水沢高女（現水沢高校）・宮城県登米高女（現登米高校）・岩手県岩谷堂高女（現岩谷堂高校）・石巻高女・盛岡中の体験記が掲載されている。

前掲笹谷『神奈川の学徒勤労動員』の中から、生徒や教員の計画による無断帰郷や教員・学校側からの工場や軍などへの帰郷要請があった学校名をあげておく。

岩手県町立前沢高女（現前沢高校）・宮城県立第一高女（現宮城第一女子高）・宮城県立第二高女（現宮城第二女子高）・宮城県立角田高女（現角田女子高）・宮城県仙台中（現市立仙台高）・山形県立第一高女（現山形西高校）・山形県米沢工業学校（現米沢工高）・山形県余目実女（現余目高校）・福島県立磐城中（現磐城高校）・福島県立相馬中（現相馬高校）・福島県立保原中（現保原高校）。

軍や工場から許可を得られずとも、さらに自己の保身をのみ図る校長と対立しても、生徒を守ろうとした誠実な教員が、あの過酷な時代にもいたのである。

四　終わりに

筆者が学徒勤労動員の実態とその中での勇気ある教員の存在に気づいたのは1994年であった。勤務高のコミュニティスクールから続いた社会教育で、逗子における勤労動員の事実を扱ったのである。逗子には、宮城県や福島県の高女生が、急造された寮にやって来ていた。その生徒の安全を図って無断帰郷を断行した教員がいたのである。このことを、戦後50年近く経ってから刊行されたいくつかの高女の動員体験記で知ることができた。しかし当時発行されていた逗子市『逗子市史　資料編Ⅲ　近現代』91には一つの史料も収載されていなかった（神奈川地域史研究会編『神奈川地域史研究第15号』96・12の拙稿「学徒勤労動員と逗子」をできれば参照して欲しい）。神奈川県に他県から多くの中学生・高女生が動員されたこと、その実態がほとんど明らかにされていないことにショックを受けた筆者は、個人で調べるよりも多くの人に調査に参加してもらって県下の学徒動員の全体像を明らかにする必要があり、またそれは本県の教育のためにもなるのではないかと考えた。その提案に笹谷氏らが応えてくれて「神奈川の学徒動員を記録する会」が結成されたのである。

戦争になったら、学校教育にどのようなことが起こるか。それを示すのが、アジア太平洋戦争末期の教育における三大愚挙すなわち学童疎開・学徒勤労動員・学徒出陣であった。現在の中・高校生に、戦争と教育との関わりを語る場合、学童疎開や学徒出陣についてはいろいろの資料もあり、語る人は多かっただろう。あるいは同年代の問題として、沖縄のひめゆり学徒隊や鉄血勤皇隊についても語られた。しかし生徒の住む地域で、あるいは自分の通う学校でどのようなことがあったのかについて、語る資料は乏しかった。一番身近な教材となる学徒勤労動員の問題は、これまでほとんど無視されてきたといってもよかろう。筆者は三十数年前に平塚江南高校に勤務した。しかし『火薬廠のある街で』に記録されたような同校の学徒動員について、考えたことも聞いたこともなかった。横浜平沼高校（旧県立第一高女）に勤務した時には、横浜大空襲時の同校のことを生徒と文化祭に取り上げた。しかし有隣堂発行『有鄰』333号（1995・8）で、同校出身者の座談会の記事を読むまで、平沼の学徒動員について考えたことはなかった。富岡高校勤務中、京浜急行線富岡駅近くのトンネルの出入口に爆弾が落とされ、爆風により多数が死傷する悲惨な空襲があったことを、その記念日といっていい6月10日前後には毎年生徒に語ってきた。しかしその被害者の中に、他県から学徒動員で来ていた中学生が複数いたことは、『記録』の資料を集めるまで全く知らなかった。なんという問題意識の無さであったことか、恥ずかしい。戦争を語り継ぐためにはまだまだ史料を発掘し、わかりやすく伝える方法を探究していくことが必要であろう。

「教え子を再び戦場に送るな」という決意をいつまで貫徹できる

のであろうか。1999年、戦争協力法（周辺事態法）・国旗国歌法・盗聴法・国民総背番号法があいついで成立させられた。国会では憲法第九条改定の動きも始まった。いつでも戦争をできる態勢が着々整いつつある。再び生徒が工場や農村に強制動員され、それを教員が引率するすることがあってはならない。

学界に常に新鮮な問題提起をし、格調高い『京浜歴科研年報』にふさわしいとは思えない駄文を書き綴った。筆者は教職30数年の間、生徒の生活・生命を守るために、自己の生命を賭けるという事態に主観的には直面しないできたと思っている。動員学徒引率の教員のような苦渋の選択を強いられることが、今後あってはならないことを思いながら、この駄文を書いた次第である。

1999・9・18

〔追記〕

本稿脱稿後、神奈川の学徒勤労動員を記録する会の機関紙『少年少女の戦争』第11号が発刊された（1999年11月）。そこには、本稿二の動員先の決め方について、福島県では校長会の関与を推測する便りが掲載されている。また『記録』の「軍の許可なき帰郷」の内容に関して、編集会議で論議があったことが記録されている。すなわち、「逃げ帰った」という記録が多くあり、誇りをもって働いていた学徒が逃げ帰ることなど考えられないし、「逃げ帰った」ことばかり語り継がれては大変だ、という意見が出、それに対して、過酷な動員生活を必死に生き抜いた生々しい体験として記録を削ることはできない、という考え方から、「軍の許可なき帰郷」の一章がまとめられたとしている。私はその会議に欠席したのか、議論の記憶はない。「逃げ帰った」のではなく、命懸けで生徒を守ろうとした引率教員の決断としての「脱出」「離脱」であったと私は考える。そのような教員が少なからずいたことを知って欲しいという思いからも、本稿を草したわけである。しかし敢えて「引き揚げた」教員や生徒が汚名を着せられることになったことも見逃してはなるまい。

京浜歴史科学研究会入会案内

京浜歴史科学研究会は、次のような活動を行っています。

◎**「『神奈川県史』を学ぶ会」**―毎月一回、原則として第一土曜日の午後に、以下の学習会を実施しています。

①**「幕末開港編」**では、『神奈川県史　資料編10近世7　海防・開国』を読んでいます。

②**「大正・昭和編」**では、『神奈川県史　資料編11近代・現代1政治・行政1』を読んでいます。

◎**『京浜歴科研会報』**―毎月一回発行して、会員にお送りしています。研究会の記録や書評などが掲載されています。

◎**『京浜歴科研年報』**―毎年一回発行して、会員にお送りしています。会員の論文などが掲載されています。

◎**「歴史を歩く会」**―年二回、春と秋の日曜日に実施しています。

◎**「集中研究会」**―年二回、春と夏に研究文献を学習する会を実施しています。

京浜歴史科学研究会は、どなたでも参加できますので、ぜひ御入会下さい。御問い合わせは、左記事務局まで御願いします。入会を御希望の方は、事務局へ申し込まれるか、左記郵便振替を御利用下さい。年会費は、三〇〇〇円となっております。

【連絡先】　京浜歴史科学研究会事務局
〒二二三―〇〇〇六
横浜市港南区芹が谷五―五九―一二　大湖賢一方
電話　〇四五―八二五―三七三六
郵便振替口座　〇〇二七〇―八―一五五三五